

III. 子供と都市



都市と自然と子供

一般的には自然と都市とは相反する概念である。人びとは緑の森や林を切り開き、田を埋め、畑をつぶして都市を造ってきた。自然を追って都市が造られたともいえる。

自然や緑の乏しい都市は、また子供にとっては住みにくい環境だろう。とくに急速な都市化、巨大都市の形成は多くの都市問題をひきおこした。過密、騒音、濁った空気、汚れた水などの反自然的な環境は、成長期にある子供たちにとってふさわしい環境ではない。

都市は自然からも子供からも最も遠い存在と見なされ、また事実そうなりつつあるように思われる。しかし、戦前は大都市であつて、子供たちにとってそう住みにくい所であつたとは思えない。町にはいつも子供があふれており、にぎやかな子供たちの歓声が聞かれた。家の前の小さな道路や路地は、子供たちにとっては広場か運動場の役を果たし、車の

自然・緑・環境

●子供たちの住む環境としての都市づくり

横浜市技監

田村 明

危険もなく自由に三角ベースなどという変則野球をすることもできた。

私は子供のころ東京のあちこちに住んだが、小学校に入った青山では、至るところに原っぱという自由空間が子供たちにとってのかけがえのない遊び場であつた。人工的につくりあげた公園ではなく自然にまわらしかしてあるから、子供たちの創造力をかきたてて何でも遊べた。宝物をかくしたり、おとし穴を掘ってみたり、それにおおばこの茎で草ずもうをする。草笛をならしたり、トンボやバッタをとったり、都心の中にけっこう小さな自然がそのままあつた。それが表通りの夜店や花電車のにぎやかさと共存しているところに都市のおもしろさがあつた。

それに大きな屋敷はのぞいても家屋はみえないほどで、見えるのは立派な緑の樹木だけだつたし、明治神宮の表参道にはそのころから立派な緑の並木道があつた。とくに公園などといわなくても、至るところに緑や自然が

あつた。

東京では杉並や目黒にも住んだが、このあたりになると至るところ田園地帯で田や畑があり、緑の藻が見える小川の水がとうとうと流れていた。草むらには蛇や蛙がいる。水の中にはヒルがいる。初夏にはうるさいほどの蛙の声、夏はホタルがとんだし、秋は虫の音、そして真赤な夕焼けと、赤焼けしてたなびいているイワシ雲、真赤に実った柿の木、冬には霜柱がざくざくたつ中を歩いてゆく、いやでも四季を感じないわけにはゆかない。そのころ東京市つまりいまの東京都部で五百万人をこえていたが、五百万人の大都市でも子供たちにとってあちこちに緑も自然もあつたのである。だからふだんは公園というところまで遊んだ記憶はほとんどない。公園は井の頭洗足池、石神井など皆立派な池もあり、遠足の時にゆくところだつた。時折は近郊の丘などによくハイキングにでかけた。芋ほりに行ったこともある。そうした地域がいまはこ

とごく宅地化され、家がびっしりと立ちならんでしまっているが、とにかく戦前までは小さな自然や身近な自然も沢山あって、それが都市的なものと一緒に子供たちにとって遊びの場になっていた。

都市から消えた子供たち

戦後の急激な都市化現象は、都市の緑や自然を急速に失わせてきた。緑や自然をつぶした宅地開発は膨大な人口を都市に吸収し、しかも若年層が多いため出生数も多い。自然増加率の高いのは大都市であるから子供たちの数は多い。それなのに町の中で子供たちが群れて自由に遊んでいる姿はあまりみかけなくなった。

いったい子供たちはどこへ行ったのだろうか。子供のいない都市がありうるのだろうか。

いやそんなことがあるはずがない。都市は生活を維持し、生活を再生産してゆく継続的なシステムであり装置の総体である。これまであった都市が今日まで継続し、明日へ続いてゆくのは、いつもそこに次の世代を担う子供たちが生まれ、育つてゆくからである。

大きな工事現場や開拓地では男たちばかりの集落があるだろう。しかし、それは都市にはならない。一時的な集落があるにすぎない。アメリカの西部開拓は、初め荒くれ男たちがフロンティアを開拓していったかもしれない。しかし、そこに女たちを連れ住まわせ、子供

を生み、育てた。そして遂に都市を作った。

「子供のいない都市がありうるのだろうか」という設問はあまりにも当然だし、愚問といつてよいはずである。それなのに今日こうした問いかけをしなければならぬほど、都市と子供という当然な結びつきが忘れられてきたのである。それはこの二、三十年間の類を見ないあまりにも急激な都市化に原因があったように思われる。

その第一は、急激な都市化によるアンバランスに対して、専ら機能の不備を補うことに重点がおかれ、生活環境は第二次的になり、その中でも弱者である子供に対しての環境整備は常に立ちおくれになってきたことである。また保育園、学校などせいぜいその量的な充足におわれて質的な面にはおよばなかった。

第二には、都市化は物的には従来の緑や自然、田園などを市街地化することによって行われる。子供たちがのびのび遊びまわった自然や緑は、都市化とともに減少し、また汚染されてゆく。都市化による人口増加に対して自然や緑に対する需要は一そう増すのに、それが都市化によって減少してゆくという矛盾を生ずるのである。

第三には、わが国の場合、あまりにも都市化が急激であったため、その人口増加の大きな部分が社会増であったことである。社会増とはつまり、地方の農村や小都市に生まれ、育つた者を大人になってから都市に吸収するわけ

で、都市を子供を育てる所であるよりも、学んだり働いたりする所としてとらえることになる。都市を子供にとって住みにくい場所でも半ばあたりまえとか、あきらめの気持があったのではないかと思われる。

子供たちの姿が町から消えていったとき、道路はどこでも車が侵入して子供たちの遊ぶところではなく、原っぱはなくなった。小川も幅が広がり、柵のある乾いたコンクリートブロックのかたまりのドブになり、水ははるかに下の方をチョロ／＼流れるだけになった。そして町にあふれていた子供たちは、もつと安全な家や学校、そして塾に閉じこもり通園、通学バスで運ばれ、町の中にあつた自由な自然や緑やオープンスペースにあまり関心を示さない。たまたまコンクリートの駐車場でローラースケートをする子供たちをみる程度である。物的にも社会的にも現代の環境は子供たちの姿を町から消えさせてしまった。

子供の生まれ育つ環境としての都市

都市が仮すまいであるなら、それでも止むをえないかもしれない。かつて都市人口は全人口の中のごく一部にすぎなかった。都市は出稼ぎの場であり、いずれば故郷へ帰るという意識を持っていた人びとが多かったのである。

ところが現代、情勢は全く一変した。

第一に圧倒的に多数の人びとが都市に居住してしまつたことである。かつて、都市は国土

の中の例外の場所であった。だから学問や仕事だけをやる場であり、子供にとつての環境としては受けとつていなかった。

第二には、田舎に生まれ、長じて都市へ出てくるというパターンは全く変わり、都市こそが最も多数の子供たちの生まれる場所になつてしまつた。都市生まれは例外ではなく、多数派となり、大都市圏生まれが大部分を占めてくるのである。それなら都市は子供たちの育つ環境でなくてはならないだろう。

第三には、この都市に生まれ育つた子供たちにとつて、親や祖父母の出身地の田舎は、もはや遠いルーツの話でしかない。都市に生まれた子供たちの大多数にとつて、もはや帰るべき田園はもつていない。この都市という環境の中で一生を送らなければならないのである。こうしてみると都市を子供たちにとつて住みにくい環境だとしておくことはできない。

都市は働いたり学んだりする環境であると同時に、子供を生み、子供を育て、子供たちが心身ともそこで豊かに成長してゆける環境にしてゆくことは、都市づくりの重要課題である。

そして今や残された田園地域も、生活様式や生活意識も全く都市化してしまつた。都市以上に車を中心とした生活であり、緑や自然があつても、しだいに荒れつつあるし、子供たちにとつてよい環境かどうかは分からない。

子供の住む環境としてとらえなおすことは、現代文明の課題ともいえるのである。

いったい都市がまだ特殊な例外的な存在で飯ずまいと考へられていた戦前までの方がはるかに都市にも自然があり、子供たちの住みうる環境であつたし、自然と人工物とを両にらみにした創造性をそだてうる場所であつた。それなのに、戦後今日、都市に生まれ都市に生まれ育ち、定住する以外に方法のない人びとが大多数になつたというのに、都市をこのように緑や自然から遠ざけ、子供たちの住みにくい環境のままにしてよいものだろうか。それでよいはずはない。

都市と自然の共生 ●新しい都市環境

自然を失つた都市の中の、さらに人為的な物理的、社会的環境の中に閉じこめられた現代っ子は、さまざまな問題が続出してきている。親子の断絶、殺人、家出、登校拒否、自閉症、暴力教室などが各方面に生じている。「現代っ子は心のもやしっ子である」と小野沢実氏は指摘し、現代っ子の病状を一、自己制御装置の欠如、二、内省不感症、三、欲望肥大症、四、精神的栄養失調症の四つと分析している。現代っ子は豊富さの中に本当の人間性や個性を十分生育させていないのではないかと思われ。

子供たちに想像を豊かにし、のびのびと個性をのびながら、また周辺に対する愛情、物質的な充足だけでなく精神的な充実感、互いの社会的ルールの体得、自己制御や内省力と

いったものを育ててゆける環境が都市に必要なのである。

そのためには現代の教育や、家庭や社会の全部を問ひなおさなくてはならないだろう。

それとともに子供たちの心と体をのびし、豊かな人間に育ててゆく環境が必要である。物質的豊かさの引きかえに人間自身の豊かさを失いつつある人間にとつて、都市に自然や緑を返してやることは、人間自身に立ちかえり内省する機会を与えることになる。

かつて都市は自然の対立概念であつた。それでも都市は小さく、密度も低く、実際には都市の内外にけつこう自然があり共存していた。しかし、巨大化し、普遍化した現代都市に生まれ育ち、ここから逃れようもなく一生を終わらなければならぬ人びとが圧倒的に増加した今日、都市が自然との対立概念であることを改め、都市と自然との共生を計らなくてはならないだろう。そして都市を子供たちを健全にのびしてゆく場にしなければならぬ。

もちろん都市と共生する自然は、初めから存在する原始の自然ではないし、またそれは望むべくもない。人間の英智と努力をもつて都市に自然や緑を作り、回復し、保全させてゆくことである。自然のままにはつておいたのでは都市と自然と緑は共生できない。金も

かけ、個別な権利を制限し、智慧をしばつて都市全体のために緑を保全し、あるいは創り出してゆかなくてはならない。

都市の森

わが国の大都市の公園面積は一人当たり二平方メートルから四平方メートル程度で都市公園平均として一人当たり三平方メートル強である。これに対して欧米諸国では広大な公園や緑地を持っている。

ドイツの諸都市はそれぞれ広大なシュタットヴァルト(都市の森)を持っている。ケルン市などは一人当たりの公共緑地は、こうした都市の森を含めて六〇平方メートルにもおおよんでいる。これらは長い間に市民の共同財産として自治体が取得していったものである。その中にはゴミを埋めたり、露天ぼりの鉱山の跡地に森林をつくりあげていったものもある。

都市の森は、市街地のずる／＼したスプロールをたちきって、都市と自然とを共生させる。そこは空気を浄化し、健康を守り、市民のレクリエーションの場になっている。その中にキャンプ場や運動場もとってある。野生の鳥やリスたちが愉しげに歌ったり走りまわったりする。市民はその中を一日散歩したり、スポーツをしたり、また自然の美しさにふれ、動物たちの姿にはほえむ。それらの森はできるだけ自然に近い形で、都心からもごく近くにある。子供たちもこうした環境では「心のもやしっ子」になる余地はないであろう。

しかし、ドイツでも始めからこうした自然を都市にもちこんだのではない。三―四百年

前には乱伐によってほとんど森林が消滅してしまつた時期もあるという。それがこれではいけないという反省の下に、都市森林の回復につとめてきたのが現在の姿である。戦後、

占領軍によつて森林が冬の燃料用にされかかつたときに、当時ケルンの市長であったアデナウアーは廃虚の中でこういった。「貧乏はやがて過去になる。緑は生きのびた市民の明日のものだ。」一本の木を切つたら二本の木を植えていったという。人間の努力と英智なくしては都市の森は生まれてこない。逆に人間の継続的な努力は、無くなつた森を回復し、失われた自然を都市の周辺に再生し、都心の真中までも自然の森林を作つてゆくのである。それは都市環境を再生させる手段である。

わが国の緑

森林面積だけからいえばわが国もヨーロッパ諸国を上回っているのである。しかし、その

森は遠くて利用しにくい場所にしかない。都市と自然は相反してしか存在しない。かつての日本人はヨーロッパ的な人工的な都市ではなく、かなり自然的な要素のつよい都市を造つた。屋敷には十分の庭があつて、緑が植えられ、公共緑地は少なくともけつこう自然の緑と共存していたのである。その名残りが戦前まで続いてきた。高度成長と急激な都市化は一挙にそれらの自然や緑を押しながしはじめた。しかし、今、われわれは都市のあり

方の反省の上に立つて、もう一度、緑と自然を都市の必然の要素として回復してゆかなくてはならない。

それには基本的には土地制度の変革も必要だが、とりあえずでも多くの手段がある。現にある山林や森が、それが公共用地でなくても、市民全体の残された大切な遺産としてゆく方法が必要である。横浜市では市民の森という独自の制度で、土地を市が借り受け、地区の運営委員会でこれを保全、利用してゆく手法がとられ、すでに大きな実績をあげている。

また、森林でないまでも、都市農業という都市内部に農業を共生させる手法も有効であろう。都市計画法の線引きも積極的に森林や農地保全のために活用すべきである。そして都市内部には公共用地はもちろん、民地であつても緑を奨励してゆく。こうした努力を側面で続けながら、積極的に森や自然をつくつてゆくのである。

自然や緑は、公害や健康というだけでなく、子供たちに人間として基本的に必要な内省力や物質でない心の豊かさを育てる。森にはあまり余計なものではできるだけ無い方がよい。そこで子供たちは創造力を養う。また、自然や緑の使い方のルールも学ばなくてはならない。森の中で皆の協同の努力が自然を育ててゆくこと、それがよい都市をつくつてゆくことを学びとるのである。そのとき子供たちの体も心も成長し充実してゆくことだろう。